





ダンジョンの転移トラップを踏んだクリスは得体のしれない不気味な空間に飛ばされていた。衣服をすべて剥ぎ取られ、手足を壁に深々と吞み込まれて身動きがとれない状態にいる。

見渡せば周囲は脈打つ肉塊で覆われ、生き物の胃の中にでも居るような気分だった。

実際、このダンジョンは巨大な生物のようなものなのだろう。罠にかかった哀れな獲物をこのように捕らえて消化吸収するのだ。

しかしクリスの肉体が溶かされているような様子はない。

痛みや熱の感触はないが、代わりに言いようのない焦燥感や高揚感が彼女の身体を蝕んでいた。



肉塊の筋を掻きわけて大きな舌のようなものが迫ってくる。
ネバついた粘液を纏ったイボだらけの舌先がクリスの身体を舐め上げる。

「——ッ!!……んんッ!!」

気持ち悪さに顔をしかめるクリス。

しかし舌が触れた箇所から強烈な甘い感覚が迸り、感じていた焦燥感の正体に気付いた。

（エッチな気分になるやつだッ、コレ）

逃げようとするも両手両足が固定されてるため身を振ることも叶わず、
そうこうしているうちに舌は彼女の身体中を無遠慮に這いまわっていく。

どうやらこの空間の粘液には全てに催淫作用があるらしく
その毒はすでに長時間曝されていた手足から全身に回っていた。





舌は大きく開かれたクリスの股下に潜り込み彼女の秘裂を何度も舐め上げていく。
粘液で滑りが良くなった敏感な箇所をイボイボが執拗になぞりあげる。

(……我慢ッ、できないッ！
こんなのでッ、イカされるなんてッ!!)

いやらしい舌の動きに引きずられクリスの腰がカクカクと卑猥に跳ねる。

細かい呼吸を繰り返し、なんとか堪えようとするも
延々と積まれていく快感を解消しきれず決壊の時は着実に迫っていた。



——遂に望まぬ絶頂を極めさせられるクリス。

「……んぐうッ!!」

催淫作用のせいかいつもより快感が重くのしかかり
しかめっ面で齒を食いしぼりながらアクメの波をやり過ぐす。







クリスは荒い息を吐きながら絶頂の余韻を鎮める。
今もキーンと耳鳴りがして視界がチカチカと明滅している。
たった一回のオルガズムで彼女は体力をかなり消耗していた。

（なんで、こんな……ッ
——いつもと全然違うッ!!）

彼女の与り知らぬことではあるが、実はこの穴蔵は獲物が達した際に生命力を奪っている。
抵抗力が弱まるアクメ時にドレインタッチをかけているのだ。

それゆえ対象の性的弱点を的確に責め、獲物をイキ地獄に追い詰めていく。



ふぁ!!

グワッ

グワッ

グワッ

グワッ

ふあッ!!

ヒクッ

ググッ

背後から伸びてきた触手がクリスの胸に絡みついた。

三又の先端が慎ましい乳房を絞るように驚掴みにして飛び出た乳首を弄る。

同じように彼女の秘裂にも同様の触手が近づき上端の包皮を器用に剥き上げた。

「——ふああッ!!」

敏感な神経の塊が外気に晒された刺激にクリスは思わず切羽詰まった声をあげてしまっていた。





平坦な肉体で殊更目立つ三つの先端を獲物の泣き所と見定めたのか
穴蔵の触手達はクリスの乳首と陰核を集中して苛め始めた。

三つの粒を触手の指に弾かれ、引っ搔かれ、捏ねられたりしてクリスの身体は強烈な快感によって面白いように跳ね回る。

「おッ、おッ、……おッ!!」

催淫液で倍加された刺激は殴られたような衝撃で彼女の頭蓋に叩き込まれ間の抜けた呻き声をあげながらクリスは悶絶する。



十数分ほど豆弄りでクリスがイカされ続けた後
背後から今度は掌状の触手が伸びてきた。

表面には大小様々なイボがびっしりと生え揃っており
開いた指から糸を引いた粘液が垂れ落ちている。





触手の掌が硬く尖ったクリスの乳首に覆い被さり
イボだらけの表面でズリズリと磨り潰し始めた。

大きなストロークで乳首のみならず脇の窪みから浮き上がった肋骨まで
粘液の弾ける水音を派手に響かせながら
彼女の絶壁な胸部を満遍なく愛撫していく。

「んぎいいッ!! — いッ!!」

胸全体が性感帯と化した異様な快感に
クリスは為す術もなく翻弄されていた。





んはっ!

いっ!

ほっ!

ん

ん

ん

ん

ん

ん

掌はクリスの下半身にも伸び彼女の股間を何度も擦り上げた。
秘部全体を包み込むように揉みこみながら
肛門から陰核まで穿り返すように指でなぞっていく。

「おうッ、——ほオッ、んオ!!」

緩急織り交ぜた激しい愛撫による快感にロクな抵抗もできず
蕩けた嬌声を漏らしながらクリスは何度もイキ果て続けた。





長時間のアクメ漬けからようやく解放されるもクリスは混乱の最中にいた。
身体を撫でられただけで経験のない快感を味わされ己の肉体の変異に戸惑いを隠せない。
絶頂明けの曇った瞳は焦点を結ばぬまま虚空を泳いでいる。
翳られ続けた乳首と陰核はかつてないほど硬く尖り立っていた。





掌の次に出てきたのはホース状の触手だった。
クリスの眼前に迫ったそれは彼女に見せつけるように口を開ける。

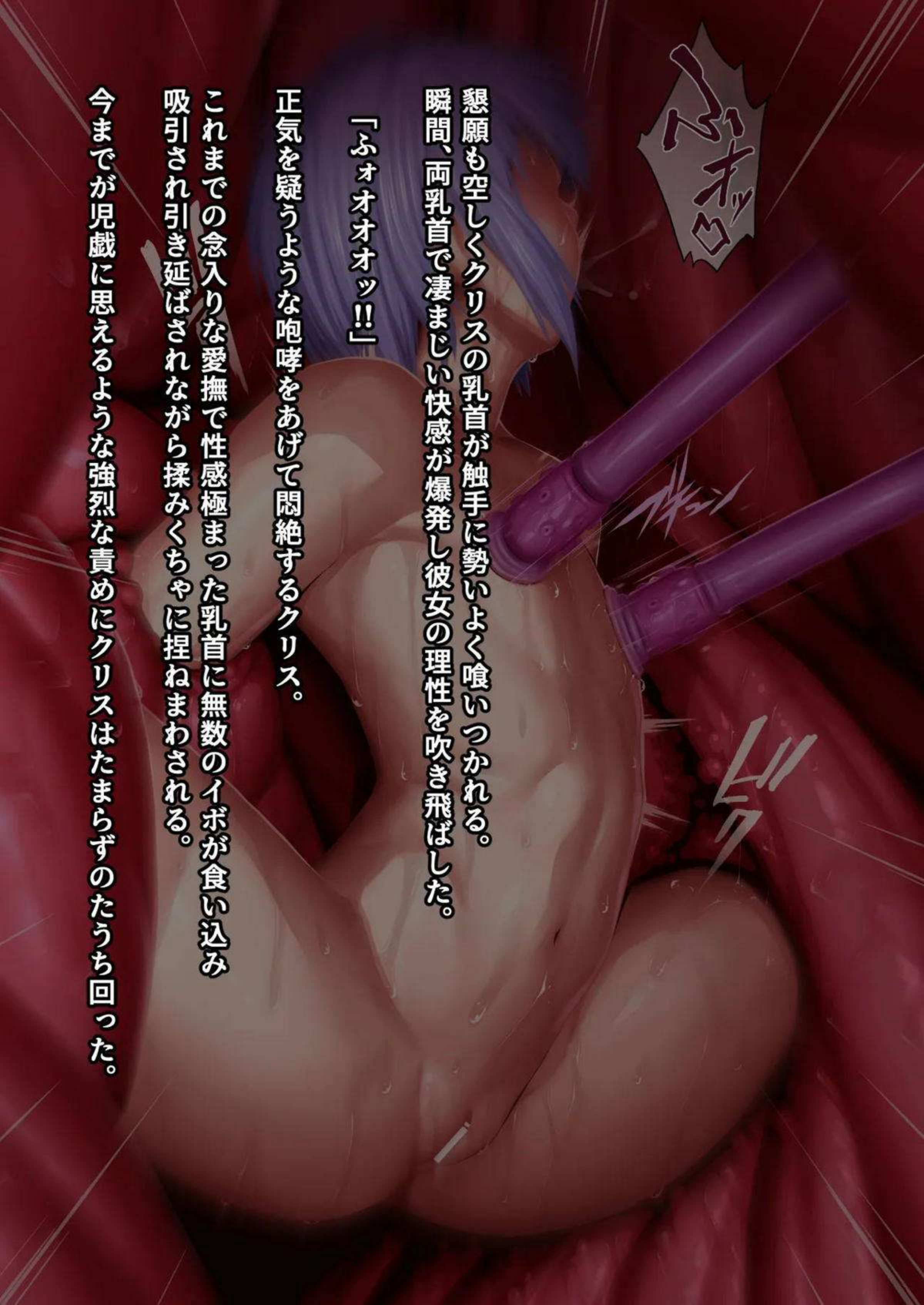
「——ヒッ!! イヤッ!!
そんなモノ近づけないでッ!!」

中はビッシリと無数のトゲやイボで埋め尽くされ、それらが不気味に蠢いていた。
呑み込まれたモノは無事で済まないと容易に理解できる光景に
クリスは引き攣った顔で許しを乞う。





ふッ



懇願も空しくクリスの乳首が触手に勢いよく喰いつかれる。
瞬間、両乳首で凄まじい快感が爆発し彼女の理性を吹き飛ばした。

「ふオオオオツ!!」

正気を疑うような咆哮をあげて悶絶するクリス。

これまでの念入りな愛撫で性感極まった乳首に無数のイボが食い込み
吸引され引き延ばされながら揉みくちやに捏ねまわされる。

今までの見戯に思えるような強烈な責めにクリスはたまらずのたうち回った。



更に陰核にも同様の触手が喰らいついた。

クリスの三つの突起粒が容赦ない動きでシゴキ回される。

「ふ……んぎッ!! ぎッ、……ひぎいいッ!!」

(こわれるッ!! さきっぱ、こわれるううッ!!)

耐えようがない苦痛じみた快感に頭をブンブンと振り回しながら
クリスはひたすらイキ狂う。

しかしどれだけ果てようと触手はその責めを緩めはしなかった。





——永遠とも思えるほどの絶頂地獄がようやく終わった。

時間の感覚すら失われるほど果て続けたクリスは
正体を失ったような顔で固まったまま荒い息を繰り返している。

解放されたクリスの三突起は悲惨な有様となっていた。
平時と比べ二回りほど大きくなったそれは
痛々しく震えながら尖り立ってその存在を主張している。







しかし見込み違いであったことをすぐにクリスは思い知ることになる。

触手の動物的で乱暴な責めと違って『彼ら』の責めは巧みで執拗なものであった。獲物を確実に追い詰める意図を感じさせる技巧で彼女の性感帯をいやらしく弄繰り回す。まるで下卑た人間の男達に身体中を舐めまわされるような嫌悪感を感じていた。

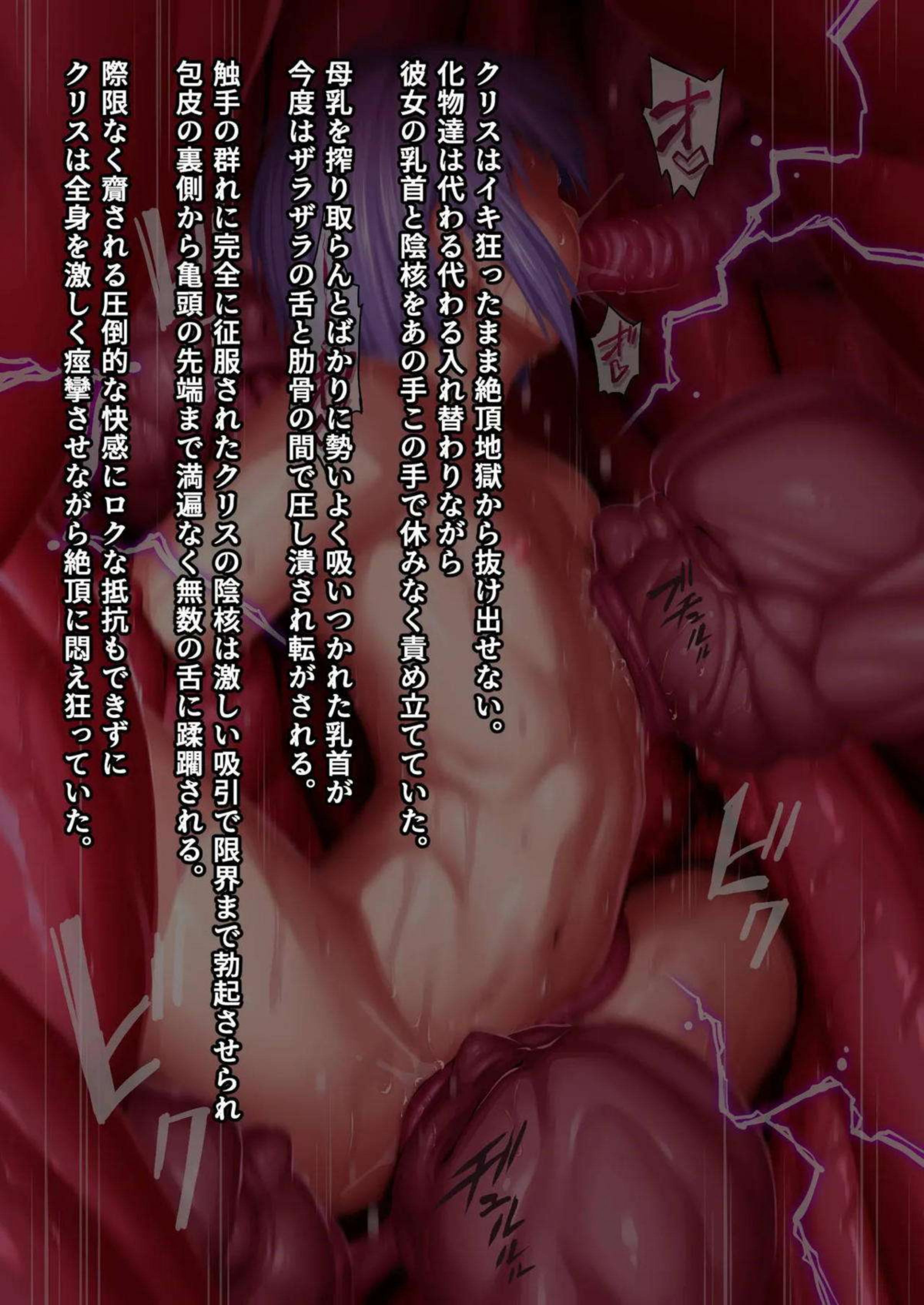
「あッ、あ♡、お——…ッ♡」

彼らの口の中で咀嚼され可愛がられるクリスの神経粒。

あっという間に絶頂に運ばれるが、そこから一度も降ろされることなく延々と彼女はより高い快感の頂きへと押し上げられていった。







クリスはイキ狂ったまま絶頂地獄から抜け出せない。
化物達は代わる代わる入れ替わりながら
彼女の乳首と陰核をあの手この手で休みなく責め立てていた。

母乳を搾り取らんとばかりに勢いよく吸いつかれた乳首が
今度はザラザラの舌と肋骨の間で押し潰され転がされる。

触手の群れに完全に征服されたクリスの陰核は激しい吸引で限界まで勃起させられ
包皮の裏側から亀頭の先端まで満遍なく無数の舌に蹂躪される。

際限なく齎される圧倒的な快感にロクな抵抗もできずに
クリスは全身を激しく痙攣させながら絶頂に悶え狂っていた。



数えきれないほどの絶頂と失神を繰り返し——、いつの間にか化物達の姿は消えていた。

後には、より一層硬く大きく尖った乳首と陰核を震わせながら
青息吐息でぐったりと疲弊したクリスだけが取り残される。

そんな彼女の下から一本の太い触手が伸びてくる。

その先端は返しのようなトゲが無数に生えた凶悪な形状をしていた。







触手がクリスの秘裂を押し分け勢いよく中に突き刺さる。
先端が最奥を叩き彼女の腹の輪郭が膨れて歪んだ。

「——ぐぐッ!!」

背筋を駆け上がる紫電の如き衝撃に、微睡んでいた彼女の意識が一気に醒める。



凸凹した触手の先端がクリスの胎内をグチャグチャに掻き回す。
狂おしいほどの快感の嵐が体内に吹き荒れ、彼女の制御を離れて暴れ狂う肉体が
後ろから伸びてきた腕に抱え込むように力ずくで抑えつけられる。

「んぎッ♡ い♡ ……ヒッッ!!」

絶頂を受け流す手段さえも封じられたクリスは
必死の形相で呻きながら半狂乱に首を振り回すことしかできなかった。





全身の内外の性感帯をまとめて嬲りものにされ、雪だるま式に膨れ上がる快感に
クリスの理性は押し潰されていく。

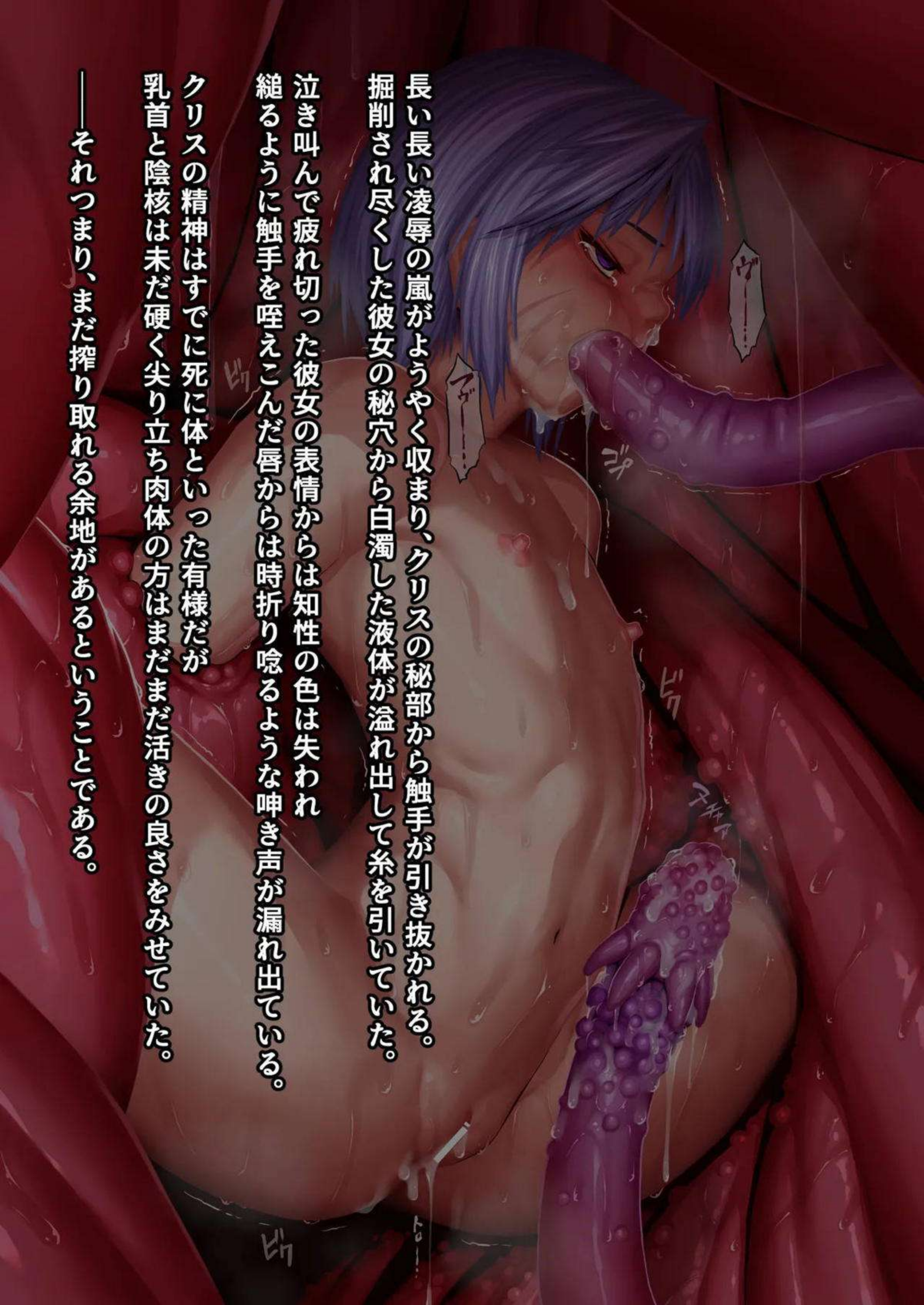
絶頂の上に更に何重にも絶頂が重なり彼女の思考は白く濁り始める。

「ジッ♡ ヴッ♡ …——ンオオッ♡」

果てのない絶頂地獄の中で彼女の瞳からは徐々に理性の光が失われていった。







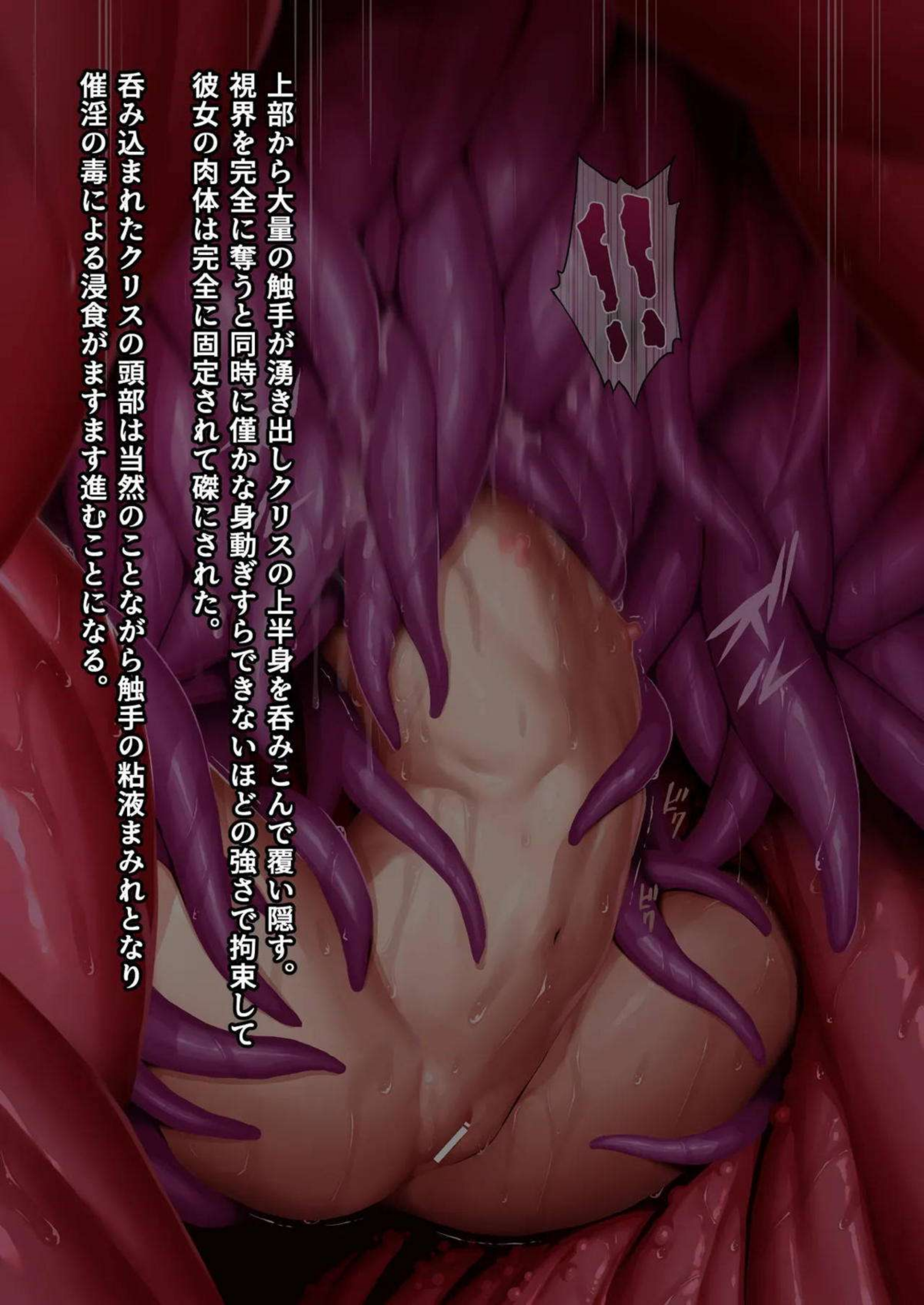
長い長い凌辱の嵐がようやく収まり、クリスの秘部から触手が引き抜かれる。
掘削され尽くした彼女の秘穴から白濁した液体が溢れ出して糸を引いていた。

泣き叫んで疲れ切った彼女の表情からは知性の色は失われ
縋るように触手を咥えこんだ唇からは時折り唸るような呻き声が漏れ出ている。

クリスの精神はすでに死に体といった有様だが
乳首と陰核は未だ硬く尖り立ち肉体の方はまだまだ活きの良さをみせていた。

——それつまり、まだ搾り取れる余地があるということである。

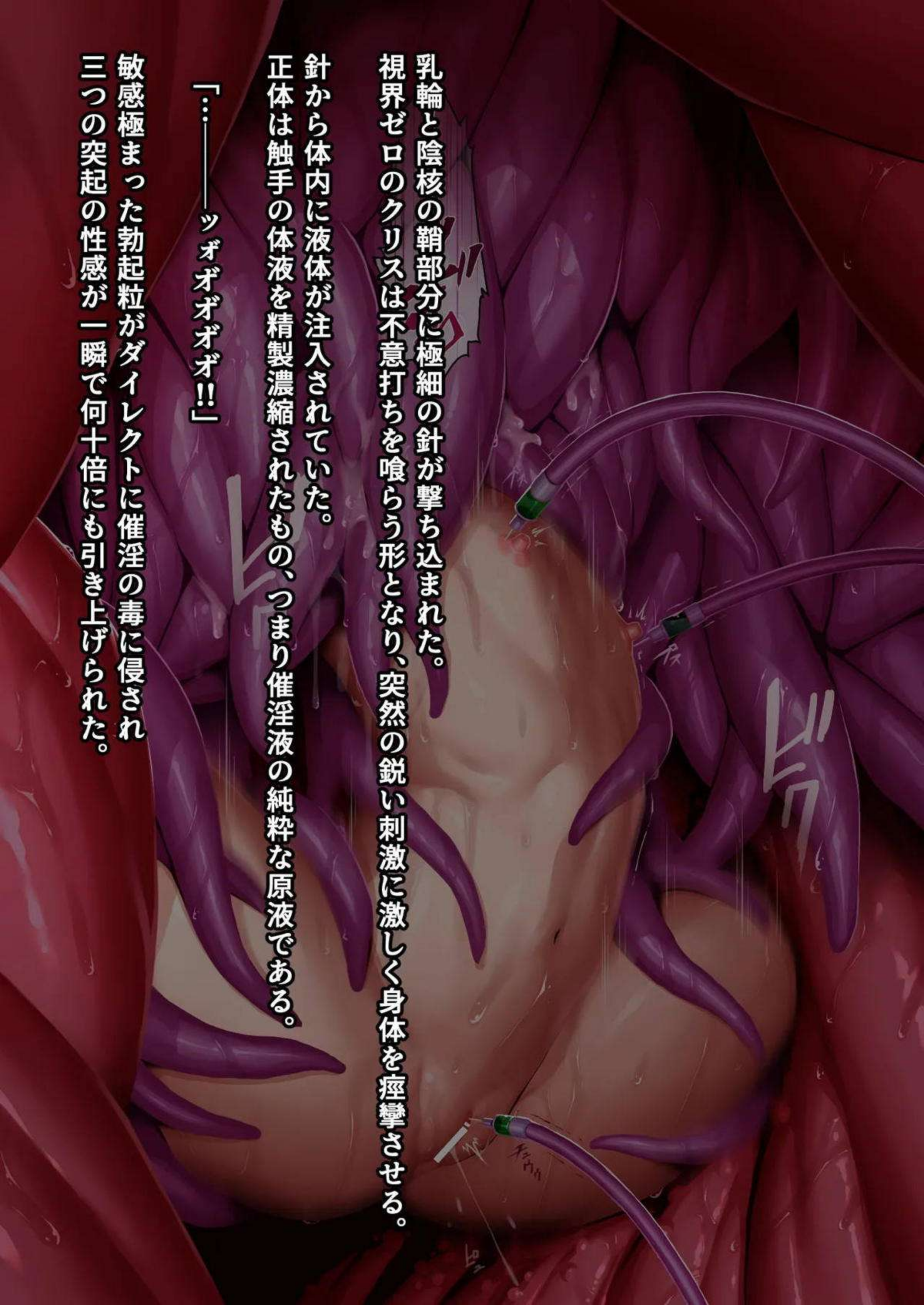




上部から大量の触手が湧き出しクリスの上半身を呑みこんで覆い隠す。
視界を完全に奪うと同時に僅かな身動きすらできないほどの強さで拘束して
彼女の肉体は完全に固定されて磔にされた。

呑み込まれたクリスの頭部は当然のことながら触手の粘液まみれとなり
催淫の毒による浸食がますます進むことになる。



An illustration showing a person's back from behind, lying down. Several purple, tentacle-like appendages are reaching out and injecting a glowing purple liquid into the person's skin. The liquid is being injected into the upper back, shoulder blades, and lower back. The person's skin is pale and appears to be sweating or wet. The background is a dark, reddish-purple color with some faint, stylized patterns. The overall tone is sensual and somewhat disturbing.

乳輪と陰核の鞘部分に極細の針が撃ち込まれた。

視界ゼロのクリスは不意打ちを喰らう形となり、突然の鋭い刺激に激しく身体を痙攣させる。

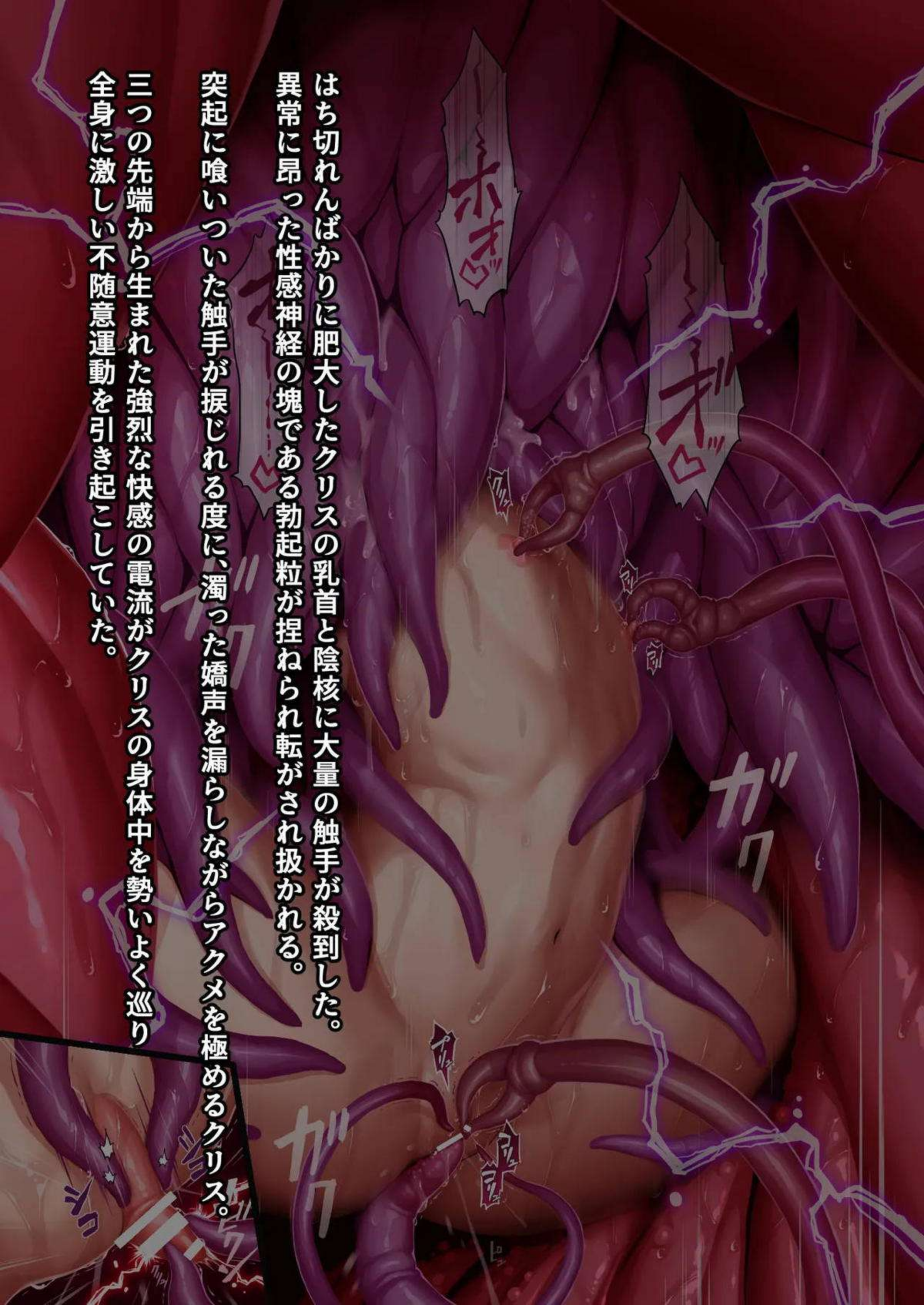
針から体内に液体が注入されていた。

正体は触手の体液を精製濃縮されたもの、つまり催淫液の純粋な原液である。

「……ッオオオオオ!!」

敏感極まった勃起粒がダイレクトに催淫の毒に侵され
三つの突起の性感が一瞬で何十倍にも引き上げられた。





はち切れんばかりに肥大したクリスの乳首と陰核に大量の触手が殺到した。
異常に昂った性感神経の塊である勃起粒が捏ねられ転がされ扱かれる。

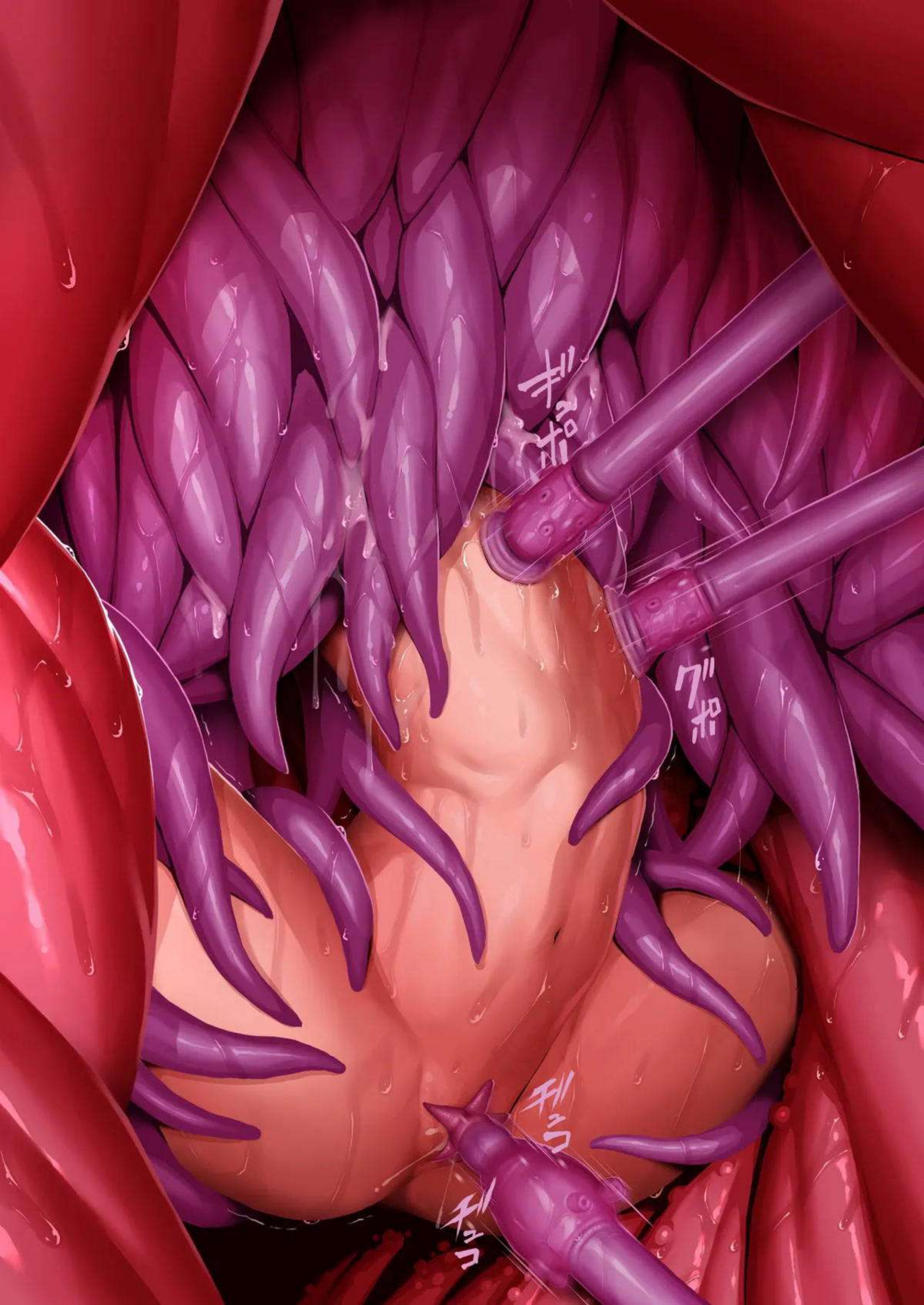
突起に喰いついた触手が振じれる度に、濁った嬌声を漏らしながらアクメを極めるクリス。

三つの先端から生まれた強烈な快感の電流がクリスの身体中を勢いよく巡り
全身に激しい不随意運動を引き起こしていた。



発狂したように暴れ狂うクリスの身体を力で抑えこみながら
その後も触手達は無防備な彼女の雌突起を延々と弄りまわしていた。







——数時間経ち、
体力を吸い尽くされたクリスの反応は弱々しいものになっていた。

すでに出洩らし状態の彼女の肉体は
数えきれないアクメを強いられ疲労が極まっている。

乳首と陰核に吸い付いた触手だけが
最後の一滴まで搾り取ろうと激しく前後に蠕動していた。





クリスを覆い隠していた触手達が引き上げ
久方ぶりに彼女の頭部が外気に晒される。

口や鼻から様々な液体を垂れ流しながら
正気を失った虚ろな目で彼女は中空を見つめていた。

彼女の制御を離れた肉体は
硬直と弛緩を不規則に繰り返しながらヒクヒクと静かに震えている。

その為、異常に肥大して反り返る乳首と陰核だけが殊更目立つ格好となっていた。



誘蛾灯に集る蟲のように再び触手達がクリスの乳首と陰核に群がった。
硬く尖る勃起粒を美味そうにしゃぶりながら彼女の生命力を更に啜り取ろうとする。

生じた快感に肉体は半ば反射的な痙攣を起こし
クリスは意識がないまま延々と絶頂を繰り返かえし続けた。

